

結婚後7年間。日本では私的な海外旅行が禁じられていたが、夫は私が親孝行の里帰りをするため、年に1、2回はど飛行機の往復チケットをプレゼントしてくれた。

「女の園」に配役するのを拒んだ木下監督が「あなたは僕が思っていた女優とまったく違っていた」と「風花」への出演を強く望んでくれたのだ。私は感動して「風花」の主役を演じた。こうして図らずも私は映画界に復帰した。

「風花」のロケは悪天候で待ち時間がかかりあった。その間、私は太平洋戦争前に日本を舞台に活動したソ連のヌ

連に多大な利益をもたらす。だがスターリンは特高に逮捕され獄中にいたゾルゲを救おうとせず、ゾルゲは44年11月7日のロシア革命記念日に東京で絞首刑に処された。

20世紀最大とされるスパイ事件の首謀者ゾルゲは（ファシズムと戦い、自分なりの思想と手法で世界を良くしようとして夢想した革命児だったのでないか）と私は思った。

られたのは61年6月21日。邦題は「スパイ・ゾルゲ 真珠湾前夜」となり、一部がメロドラマ仕立てに変えられてしまったが、欧州で大反響が起ころ、モスクワ映画祭に出品することになった。けれど映画はモスクワの土を踏まずに突き返されてしまう。検閲試写で作品を見たソ連の某政府

映。モスクワの21館で闇切符が出回るほどヒットした。ゾルゲの故郷アゼルバイジャンの首都バクーにはゾルゲの記念公園や記念碑が作られ、通りもでき、記念切手まで発行された。私は思想や生き方には様々な違いがあるということを身にしみて知った。徹底した取材を元に監督を

岸 恵 子

20

ゾルゲ主人公の映画企画

フルシチヨフ感動ソ連でも上映

初めて里帰りした時、タラ

ツプを降る私は黒山の報道陣と「風花」という台本を持って迎えてくれた木下恵介監督の姿に心底驚いた。決別したはずの女優なのに日本映画は私を忘れずにいてくれた。

しかも「会社が売り出したメロドラマ女優」と私を嫌い

パイ、リヒャルト・ゾルゲの獄中手記を読み、ゾルゲ事件（1941年10月）に関する資料をむさぼり読んだ。

猜疑心の深いスターリンはドイツの対ソ侵攻（バルバロッサ作戦）を事前に伝えたゾルゲの正確な情報を当初、無視したが、その後「日本軍が対ソ攻撃せずに南進する」と見抜いたゾルゲの歴史的な極秘情報は窮地に立っていたソ

浅学非才な私が事件の是非を判断するつもりはない。だが「軍より確かな知識と複雑な国際情勢を分析できた人は

彼を置いて他にない」と司馬遼太郎さんが語るように私は人間ゾルゲに魅力を感じ、映画「ゾルゲ氏よ、あなたは誰(原題)」の企画を立てた。

私の情熱が夫を動かし、日本を舞台に活動した彼や仲間(の姿を描いた合作映画が封切



何度も訪れたモスクワの赤の広場で

高官が言い放ったからだ。

「ゾルゲという人物は我が
國に存在しない。ソビエト連
邦にスパイはいなかった」

ところが後日、フランス駐在のソ連大使が作品を直接クレムリンに送り、「こんな素晴らしい映画を棄却したとは」とフルシチョフが感動してくれた。映画は無事にソ連で上

ン宮殿でもてなされた。

夫がフルシチョフと懇談している間、婦人たちにウオツ力を勧められた私は記念とし

てウオッカのグラスを頂いた。だが自慢のあまり帰りの飛行機で周囲に見せびらかしてすっかり機内に忘れてしまった。生来のドジが顔を出したのだった。残念！（女優）